

## 1 参加大会

第47回ジャパンオープントーナメント

日時：平成30年8月3日（金）～8月7日（火）

場所：茨城県 水海道総合体育館他

## 2 審判会議での確認事項

### ●競技委員長高野修氏

- ・7月に出されたガイドラインにあるように、同チームの複数が負傷した場合は1名につき最大2名の入場が許可される。罰則が適用されなければ、その場合は3攻撃不参加となる。
- ・プレーヤーが異なった色や番号でコートに入った場合はボールの所持を変更する必要はない。先日のインターハイでもそのような事象があった。試合中にそのようなことが起こらないように、試合前にしっかりと確認をしてほしい。
- ・選手兼監督という状況の場合、もしベンチに役員が誰もいなければ、選手がチームタイムアウトを申請することはできない。選手兼監督がベンチに戻り、グリーンカードを出すということになる。

### ●審判長福島亮一氏

- ・全国大会にノミネートされて、この場にいるレフェリーに細かい判定に関する話を話す必要はないと考えている。それぞれが大会に入る前にどのような準備をしてきたかが最も重要である。
- ・全会場の準備状況を見てきたが、明日からの競技に向けて、体育館内だけでなく、多くの方々が大会に向けて準備をしてくれている。レフェリーとしてコートに立つ前に、まずはそのことに感謝の気持ちを持ってほしい。
- ・競技当日に会場に入った時に決して会場が完成していると思っはいけない。安全面を最重要視して様々な箇所を点検してほしい。
- ・キャッチネットは長いとボールが絡みつくので、多少浮いている程度に結びつけておくといい。
- ・コーチングゾーンのラインはサイドラインから離れた位置に50cmほど引けばよい。

## 3 担当試合における気づきと反省（他者からのアドバイス）

### ●大会1日目 8月4日（土）

○女子1回戦 香川銀行 24-17 レキオクラブ

レキオクラブが終始7人攻撃をしており、GK不在という状況が続いた。CRの位置を常にベンチと反対側とするために、常に通信機器を活用して連絡を取り合った。判定として難しく感じたのはレキオクラブがテクニカルミスやターンオーバーで攻守が切り替わった後にGKが不在で香川がシュートを試みた場合のシュートへの接触の影響を見極めることだった。7mTを判定したが、その際の役割分担はGRが7mTを、CRが必要ならば罰則という風にうまく分担すべきだとも感じた。

○女子1回戦 小松クラブ 30-19 茨城鬼怒 girls

罰則は茨城にYCが2枚のみというゲームであった。序盤で大きな罰則等がまったくなく、軽微なものをどこで基準を引くかが難しいゲームであった。点数もなかなか入らないゲームであり、魅力あるゲームという視点でもパッシブの基準を早めに設定するなど工夫をすると良かった。

### ●大会2日目 8月5日（日）

○男子2回戦 EHC 27-24 水海道鬼怒清流

6m-9m間の攻防における基準を10分間でいかに明確に示すかという点を課題にゲームに入った。両チームともにこちらの基準を理解しようという雰囲気の良いコミュニケーションをとりながら前半を同点で折り返した。後半になり、点差がつき始めるが相手の退場をきっかけに追いつくなど、一進一退のゲームとなった。時間が進むにつれて徐々に両チームともに熱くなってくる場面もあったが、とにかく冷静にゲームの勝敗を分けるポイントの見極めをしながら丁寧に判定をした。その結果終盤に得点を順調に重ねたEHCが勝利というゲームであった。

●大会3日目 8月6日(月)

○男子準決勝 HC和歌山 27-19 FOG

両チームともに今日2試合目ということもあり、立ち上がりは様子を見ながら徐々にテンポをあげていこうという感じであった。6m-9m間のピボットプレーヤー周辺の攻防、ライン側のプレーの見極めに注意しながら基準を両チームに伝えていった。前半はYCが1枚、顔に手が入ったことによる退場が1回と落ち着いた雰囲気の中、同点でハーフタイムを迎えた。後半に罰則に相当するプレーがあれば退場以上ということを確認して後半に入った。両チームともに後半に入ると徐々にリードを凶ろうと熱くなっていく中、HC和歌山が点数を少しずつ広げていった。しかし、顔を叩く行為、サイドシュートをしようとして空中にいる選手に対する接触で退場が続き、雰囲気が悪い時間帯があった。どのような状況であっても許されない行為に対しては毅然と罰則を示すという必要性を感じた。

●大会4日目 8月7日(火)

○男子決勝 フレッサ福岡 29-23 HC和歌山

ゲームの序盤にフレッサ福岡のピボットプレーヤーとHC和歌山のDFとのポジションの取り合いの中で激しいやりとりがあり、両選手が熱くなる場面があった。それぞれに口頭で注意を促して常に2名のやりとりを観察し続けていることを伝えた。その後はそのようなケースもなく、お互いに冷静にプレーを続けた。両チームともに選手・役員と必要なコミュニケーションがとれて、こちらの基準を理解して合わせようという意図が十分に見えた。フレッサ福岡のリードで後半を迎えたが、HC和歌山は2-4のDFシステムがうまく機能してフレッサ福岡のセットOFのリズムが崩れた。しかし、フレッサ福岡は体力的なアドバンテージをうまく使ってDFから速攻で得点を重ねていった。後半はHC和歌山に退場が1回のみと両チームともにこちらの基準に合わせてしっかりとコントロールしながら試合をしてくれた。

4 他のレフェリーを観察して

様々なペアのレフェリングを観察して感じたことは、ゲームの基準づくりがいかに大切であるかということである。ゲームで最初のオーバーステップ、オフエンシブファール、エリア内DFなどの基準をどこに引くか、またいかに一貫性を持たせるかということのをうまく行えているペア、難しさを感じているペアがいると感じた。また、永遠の課題である位置取りによって見えるプレーと見えないプレーに大きな差が出ることも感じた。プレーの最終局面だけでなく攻防が始まる前の位置等の関係性などを踏まえて、いかに予測して良い位置から観察をするかという点をさらに共に研究していきたい。

5 今後の課題

日本協会指名レフェリーとして各大会のレフェリー団の模範となるようなレフェリングのみならずリーダーシップや行動を取っていきけるようさらに研鑽を削っていききたい。富田副審判長からは指名としての自覚をさらに持ち、機械的に判断・判定をして、許さないことをもっと明確にすべきだというアドバイスをいただいた。今後のブロック大会や9月に開幕する日本リーグ等のゲームに今回の経験を活かしていきたい。

6 終わりに

今大会は平成31年度の「いきいき茨城ゆめ国体」のリハーサル大会ということで、ボランティアスタッフを含めて実に多くの方々に来年度の大会成功のために関わられていることに感銘を受けた。初日の審判会議で福島審判長が言われていた通り、レフェリーとしてこのような大会で安心してレフェリングに専念できるため様々な方がサポートしてくださっていることへの感謝の気持ちを持って各大会に臨まなければならないと改めて感じた大会であった。福島審判長、浜田副審判長、富田副審判長、茨城県ハンドボール協会の方々を始めとする今大会に関わられたすべての方々のおかげで全日程を無事に終えることができたことに感謝して結びとしたい。